ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　ほんの一瞬。僅か数秒の出来事だった。

　ゆっくりと倒れる六塚の様子を、雅也は現実感の無い目で眺めていた。

「……なん、で？」

　ここでようやく、彼は六塚が、自分を突き飛ばしてガブリアスの攻撃の身代わりになったのだと分かった。

「あ……あぁ……」

「おう、坊主……生きてた、か？」

　おぼろげな目で自分を見つめている事に気がついた六塚。浮かべる笑顔には、夥しい量の血で汚れていた。

「いや……良かった。なら、いい……」

　目元を和らげるが、助けてもらった彼には、どうして六塚がそんな顔を出来るのか、分からなかった。

「い……いま、ハピナスを――」

「無駄だ……こうなったら、あいつ……じゃ、どうしようもないよ」

　口が動くたびに、更に血が溢れ、地面に池を作る。

「なら、なんでっ？」

　か細い声だったが、雅也ははっきりとそう叫んだ。

　自分を突き飛ばさなきゃ、こんな事にはなっていないはずなのだ。

　理解が追いつかないその行動に、雅也の頭は混乱していた。

　そんな状態の彼の問いに、六塚の笑顔はフッと消える。

　だが、すぐにクスリと口角を上げた。

「そりゃ……目の前で子供が死にそうなの見たら……こう、するだろう？」

　さも当然と言う風な口調。その様子が、雅也にはとても痛々しく思えていた。

「いずれ……分かると思うぜ。その内、な」

「……そん、な」

　いつの間にか、流れる血の量は減っていた。最初、雅也はそれが、六塚の容態が良くなっていくものだと思っていた。

　それが違うと思ったのは、六塚の目から、だんだんと光が消えていった時だった。

「……え？」

　途端、彼の体から何かが抜けたように、力が抜けた。雅也はそれが『動かなくなった』という事に、本能的に気がつく。

「あ……あの……」

　にも関わらず、雅也は六塚に話かけた。当然、返事は無い。

「……まだ、やる？」

　その時、今までじっと沈黙を保っていたジャックとガブリアスが動く。ジャックは無表情で、雅也にそう尋ねた。

　瞬間、自分のすぐ近くで、何かの割れるような凍った音を、雅也ははっきりと聞いた。

　返事をせず、雅也は勢いよく立ち上がり、思いっきり後ろへと退がる。

「……どこ行くの？」

　脱兎のごとく自分から離れていく雅也を、ジャックも追いかける。その後ろを、ガブリアスもついて行った。

　後ろから形容のし難い衝撃が迫ってくるのを感じながらも、雅也は走っていた。どこに行くかなど、彼は決めていない。

　そもそも何をしたいのか、彼自身でさえよく分かっていなかった。本能の赴くまま、ただ森の中でジャックから逃げているだけなのである。

　午前中からずっと戦いっぱなしだったり、地面に打ち付けられたりしたせいで、四肢を動かすたびに体に激痛が走るが、雅也は気にも止めなかった。寧ろ、今もなお走る速度は上がっている。

　だが――

「……逃げられないよ？」

　そんな彼のスピードに、ジャックはガブリアスの背中に乗って、雅也との距離を確実に縮めていた。

　そしてついに、雅也は絶対に逃げることの出来ない所にまで追い詰められる。

　視界が明るくなると、そこは平地。先程までいた森の中とは打って変わって、周りには何も無い。一瞬、ここが山の中であることを忘れそうになる程だ。

　だが、何も無いせいで、かえって死角を作れないため、これ以上走ってもジャックから逃げる事は無理だと判断した雅也は、そこで速度を緩める。

振り向くと、後ろからはジャックが迫ってきていた。ガブリアスの動く抵抗にならないように背中で身をかがめている。だが、だからといってジャックから迸る威圧感を、雅也は感じていない訳では無い。

　しかし、同時に今の雅也は、先程までは耐えることのできなかったはずの威圧感を感じていなかった。

　何がしたいのかは分からずとも、何故走っていたのかは分かっているからだ。

　六塚が死ぬ前まであった彼の意思。それは『戦って逃げる』こと。

　だが今の雅也に、その意思は無い。

　あるのは――

　その瞬間、雅也の視界からガブリアスだけが消えた。代わりにジャックの足元で、紫色の星のようなポケモンが、まるでフリスビーのように回転しながら浮遊している。しかも、ジャックの後ろに、隠れるように緑色のポケモンが立っていた。同じく、星型のポケモンに乗っている。

　そいつ等が一体どんなポケモンであるか認識する前に、ジャック達一人と二匹は、空高く舞い上がる。丁度太陽をバックにしているため、思わず上を見上げた雅也は目をつぶりかけた。

　だが、そうなりそうなのを、寸前で堪える。

　目を瞑っちゃいけない。本能がそう告げていたからだ。

「……！」

　焼けるように熱くなる眼球が映すぼやけた視界が、急に曇る。何か白い、直径百メートルはあろうかという巨大な球体がジャックのすぐ上で一つ、太陽を覆っていた。

「……」

　ジャックが何かを呟く音が聞こえ、雅也はこれがジャックのポケモンによる攻撃だと知る。

　あの攻撃をモロに受けて、生き残っている未来を、雅也は想像出来なかった。恐らく、苦しむ間もなく消し飛ぶだろうと彼は思う。そう思った瞬間、彼の体は再び硬直する。

　だが彼はさっきの時とは違い、考える事を止めなかった。

　今彼が持っている意思。それは『とにかく逃げる』こと。

　このことの重要性は、田島辰巳から耳にタコが出来るほど言われていた。これが重要だった最近の例では、太一と一緒に密猟者の連中と戦った時だろう。

　しかし今ようやく、雅也は本当の意味で、如何にこの『とにかく逃げる』ことがどれだけ重要だったのかを知った。

　動け。ボールを取れ。

　今の彼の頭の中で、これと似たような言葉が何度も反芻している。

　そして、ついにあの巨大な白い玉が動き出す。

　同時に、雅也も腰に付いたボールを取る。

　物凄い勢いで落ちてくる球体。後もう少しで雅也に当たりな時。

　雅也はボールの中からルカリオを出した。適当に出した訳ではない。この状況を生き延びるために、ルカリオが必要だと分かっていた。

　焦ったような形相をしつつも、ボールの中からでも自分が何をすべきかちゃんと理解していたルカリオは、両腕を球体に向けて突き出す。

　だが、エネルギーはちゃんと溜めていたはずにも関わらず、両手の間に出来たエネルギー弾の大きさは、テニスボール程の大きさしか無いことに、ルカリオは愕然とする。

「『波導弾』！」

　そんなことを知らない雅也は、そう叫んだ。

　発射される『波導弾』は、真っ直ぐ球体に向かって突き進む。そして――

　球体が爆発した。